

編集後記

編集長(ダン シロウ)

第7巻第二号(通巻26号)をお届けする。新しい顔ぶれ、創刊時からの息長い連載者、20代から間もなく70才までと、多様さに充ちた執筆陣は、対人援助という概念を幅広くとらえているからだ。

事情でパスの方、いただいたモノがマガジンの枠内で対応できず掲載できなかった方もあるが、とにかく継続は力なりで、又一冊だ。

連載中の複数の方達が、お店で言うならリニューアルオープンを模索されている。かくいう私も、「螻蛄の斧」とタイトルした大枠の中で、(1)続・家族理解入門(2)トークライブ2001(3)次の一歩 と並行形式を採用している。連載において、どれも未完結のまま、新しいモノが開始されるなど許されなさそうだが、こんな書き方もこのマガジンならではである。

だが、考えていただきたい。人生はそういうものではないか？一つが終わって、次のことが始まってきたか？前のことが終わってから、新しい何かが生まれたか？

つまり、そういうことである。このマガジンは、通常の雑誌概念寄りではなく、人生寄りなのだ。煩雑、複雑かもしれない。しかし、新しい。

この新しさも又、対人援助学マガジンだからこそ許される、豊かさの一端だと考えるのだが、いかがなものだろう。

編集員(チバ アキオ)

山形県酒田市の土門拳記念館に足を運んだ。私はオリンパスのTG3というタフネスカメラをゲットしてから、普段から持ち歩くことが増えた。この機種に関連のある会社にゆかりのある小学校の同級生、橋本総子さんにカメラの楽しみ方を教えてもらった。私の連載も数回前まで、橋本さんの作品を提供していただいていた。数ある橋本さんの作品を見て、掲載をお願いする写真を見つけるなかで、いろんなことをさらに自然と知るようになったように思う。それから写真を撮るのが面白くなった。橋本さんにこの場を借りて、心から御礼申し上げます。

土門拳記念館は日本で初めての写真家の記念館ときいていた。写真家、土門拳に関する事前の知識はほとんどなく記念

館を訪れた。ここで不思議な経験をした。写真は常に社会的弱者を映し出すのである。それが被写体を浮浪児、決して豊かとはいえない人々の日常の場面、ヒロシマ・ナガサキの被爆者としたときはもちろん、被写体が仏像や文楽にまつわるものになっても変わらなかったのである。仏像も文楽も多くの職人の手によって作りあげられている。その歴史をかえりみれば、決して豊かだったとは言えない(ストイックも含めて)職人、多くは名もない職人を感じずにはいられなかった。仏像を彫るにしても、その道具がいるしそれを作る人がいる。溶かして鉄から形成し、刃を打つ。それをモノによっては1000年以上前の職人たちが可能にさせたのである。彼らの仕事、つまり「技」を写すことで、彼らが現代に写しだされているのである。それを可能にしたのは土門拳というまた一職人である。フィルム、手巻きの時代にこれだけの作品を残す偉業に感嘆した。社会主義カメラマンを晩年自称したときが、写真の持つ影響力と思想性を再確認する機会となった。

この対人援助学マガジンも現代の対人援助学領域の職人をうつし出す媒体でありたいと思っている。

編集員(オオタニ タカシ)

対人援助学マガジン 25号の発行から3ヵ月。私が所属する障害福祉に携わる職場は、多かれ少なかれ相模原市の事件の影響を受けた。私自身も色々気持ちが揺れることが続いた日々だった。連載に登場する私の弟は、現在生活型の施設にいる。そのため、私自身や家族の心中について人から気遣われることもあったが、今のところ私も家族も目立った変化はない。私自身は、まだ色々やっとしたものを感じながら、うまく語るができないままである。

この件に限らず、日常の中に「排他」の空気を強く感じるようになってきた気がしている。そこから改めて考えると対人援助学マガジンには「排他」がないなあと思う。テーマも切り口も用いる手段も様々で、全てが繋がっていて、意味がある。そんな多様性、可能性を感じさせてもらえることが、どこかで気持ちの支えになっている。

先日、マガジンで「養育里親」について執筆しておられる坂口伊都さんが、私の職場が主催する研修会で講師を務めてくださった。自分自身は別の研修の現場担当者であったため直接お話は聞けなかったが、資料を読んだだけでも十分面白く、考えることも多かった。養育里親をされる方にも、色々な考えやスタンスを持った方がおられるのだと思うが、坂口さんの姿勢は「排他」とは真逆のものでした。

また、今号から、マガジン執筆者の竹中尚文さんと木村晃子さんによる書簡型連載がスタートします。これは私がマガジンの純粋な読者であった時代にこんなことができたなら面白そうだなあ・・・と思っていたことを、おふたりが時間をかけ、ゆっくりと温めながら形にしてくださいました。普段の執筆とはまた違う、「手紙」の中で交わされる言葉が、私にはとても近く、あたたかく、そして重みをもって感じられました。ぜひ、読んでみてください。

マガジンで執筆し、編集に関わる機会をもらい、そこから展開されていることが、自分にたくさんのことを与えてくれているように感じています。他の執筆者や、読者の皆さんは、どうでしょうか？

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻26号

第7巻 第二号

2016年9月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第27号は2016年12月15日
発刊の予定です。

原稿締切2016年11月25日！

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもありますが、執筆依頼はしていません。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今日記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数(ずっと・・・というのもあります)。多くの方達が

連載7年目を迎えています)を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって書いていただく方には、対人援助学会への入会をお願いします。まだ登場していない、対人援助領域からの積極的参加を求めます。

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

映画「道」を観たのがいつ頃のことであったか記憶にない。覚えているのは、主演女優のジュリエッタ・マシーナが監督フェデリコ・フェリーニの妻であること。アンソニー・クインの役名がザンパーノという無教養な男であること。彼は「その男ゾルバ」での名演や、「アラビアのロレンス」での存在感で忘れられない役者であること。

F・フェリーニの映画からは、いろいろなインスピレーションを貰った。「アマルコルド」のノスタルジックな映像から、イタリアの田舎町への関心が喚起された。監督の故郷リミニの沖合、アドリア海クルーズの大型客船が行くのを見上げる住民目線は、幼い頃の琵琶湖で観光船を見上げた記憶と重なる。

こんなにたくさんの記憶や連想ががそらで出てくる映画がある一方、最近観た映画のことは、時には、観たことすら記憶していない。映画の質が落ちたのか、私の記憶力が落ちたのか。言わずもがなか・・・

2016/09/25 団士郎